

令和7年度前期学校評価 教職員・児童・保護者アンケート結果

		十分行った	行った	全く行わなかった
1 地域と連携・協働した教育活動の推進	教職員	40.0%	60.0%	0.0%
	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	
	保護者	83.7%	11.6%	4.7%
	児童	85.7%	11.7%	2.6%
教職員		40.0%	60.0%	
児童		85.7%	11.7%	2.6%
保護者		83.7%	11.6%	4.7%
<p>○教職員は全員が行ったとしているのに対し、児童、保護者ともに、そう思うは8割強となっている。</p> <p>○学校としては、町教委の社会教育や、町役場、各種団体及び企業と連携した教育活動を推進しているという実績がある一方で、児童や保護者に、その意義やねらいについての説明が不足している課題が明確になったと考える。</p> <p>○今後は、「防災フォーラム」等、地域と連携した学習機会を予定していることから、そのねらいや意義を説明するとともに、行う教育活動がねらいや意義と正対するよう精度を上げていく。</p>				

		十分行った	行った	全く行わなかった
2 児童の学習状況の把握と授業改善	教職員	33.3%	66.7%	0.0%
	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	
	保護者	74.4%	23.3%	2.3%
	児童	82.1%	15.4%	2.6%
教職員		33.3%	66.7%	
児童		82.1%	15.4%	2.6%
保護者		74.4%	23.3%	2.3%
<p>○教職員は全員が行ったとしているのに対し、児童は8割強、保護者は7割強となっている。</p> <p>○学校としては、通常学級の担任及び指導方法工夫改善の加配教諭全員が、北海道教育庁渡島教育局の授業改善プロジェクトに参加し、各教諭が年3回、指導主事に授業を公開し、具体的に指導を受ける取組を進めている一方で、「授業がわかりにくい」という思いをもつ児童がいるという課題が明確になったと考える。</p> <p>○今後は、授業改善プロジェクトの取組を継続するとともに、児童に授業アンケートを実施し、具体的な授業改善につなげていく。</p>				

		十分行った	行った	全く行わなかった
3-① 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善	教職員	22.2%	77.8%	0.0%
	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	
	保護者	83.7%	11.6%	4.7%
	児童	76.9%	14.1%	9.0%
教職員		22.2%	77.8%	
保護者		83.7%	11.6%	4.7%
児童		76.9%	14.1%	9.0%
<p>○教職員は全員が行ったとしているのに対し、児童は8割弱、保護者は8割強となっている。</p> <p>○学校としては、通常学級で授業をする教諭全員が、北海道教育庁渡島教育局の授業改善プロジェクトに参加するとともに、特別支援学級を担任する教諭は北海道教育庁渡島教育局の特別支援教育担当指導主事に授業を公開し指導を受け、意識的に授業改善に取り組んでいるものの、依然として、授業に課題が残っていることを真摯に受け止めなければならない状況と考える。</p> <p>○今後は、引き続き、指導技術や授業構想力を高め、児童の主体性や協働性を引き出す授業改善を進めていく。</p>				

			十分行った	行った	全く行わなかった	
3-②	学習活動の位置づけを工夫した授業改善	教職員	33.3%	66.7%	0.0%	
教職員		33.3%	66.7%			
<p>○本項目は、教員のみに実施し、全員が行ったとしている。</p> <p>○これは、主に地域連携による取組との関連や、教科横断的な学習を意識したカリキュラム・マネジメントを図ったり、熊出没により外での学習ができなくなったりしたことを見鑑み、年間指導計画を修正するなどしたことによるものである。</p> <p>○今後は、前期の実績を踏まえ、次年度の計画に活かしていく。</p>						

			十分行った	行った	全く行わなかった	
4	学習習慣定着のための手立て	教職員	44.4%	44.4%	11.2%	
		保護者	81.4%	18.6%	0.0%	
		児童	80.8%	17.9%	1.3%	
教職員		33.3%	66.7%	0.0%		
保護者		81.4%	18.6%	0.0%		
児童		80.8%	17.9%	1.3%		
<p>○児童及び保護者は8割程度が行ったとしているのに対し、教員の1割が全く行わなかったとしている。</p> <p>○本校では、「学習のきまり」を定めるとともに、学習習慣の形成に向け、家庭学習ノートの展示等の取組は行っているものの、児童が自身の躊躇を克服する家庭学習の手立てを講ずるまでは至っていない現状があるということによるものと考える。</p> <p>○今後は、過去の「ほっかいどうチャレンジテストや」A I ドリルなどを活用し、下学年まで遡って、理解不足な内容を特定するとともに、主に教科書を活用した家庭学習での「学び直しの指導」を行っていく。については、各家庭においては、下学年で使った教科書を捨てる事のないようにしていただきたい。</p>						

			十分行った	行った	全く行わなかった	
5	主体的な学習習慣の形成	教職員	22.2%	77.8%	0.0%	
		保護者	78.6%	16.7%	4.8%	
		児童	66.7%	26.9%	6.4%	
教職員		22.2%	77.8%	0.0%		
保護者		78.6%	16.7%	4.8%		
児童		66.7%	26.9%	6.4%		

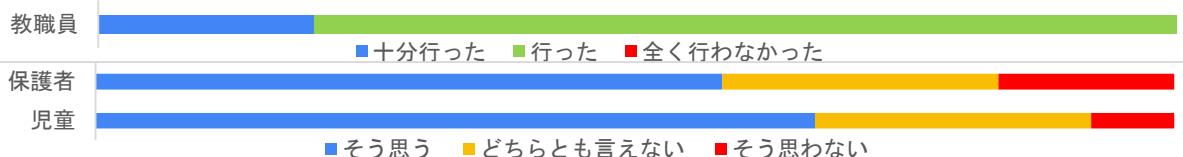
<p>○教職員は全員が行ったとしているのに対し、児童は7割弱、保護者は8割弱となっている。</p> <p>○学校としては、ipadを持ち帰らせ、A I ドリルで復習するよう課題を出すなどの取組を進めていると考えているが、一方で、「宿題をやることが家庭学習」となり、自分で考えて進んで家庭学習に取り組むという面では十分ではないと考えている児童や保護者が少なくないということだと考える。</p> <p>○「4 学習習慣定着のための手立て」でも触れたが、今後は、児童が自分の躊躇を明確にし、教科書やA I ドリル等を用いて、躊躇を克服する学習を進められるよう指導を徹底する。</p>					
--	--	--	--	--	--

			十分行った	行った	全く行わなかった
6	一人一台端末を活用した学習活動の推進	教職員	33.3%	66.7%	0.0%
		そう思う	どちらとも言えない	どちらとも言えない	そう思わない
		保護者	88.1%	7.1%	4.8%
		児童	75.6%	20.5%	3.8%



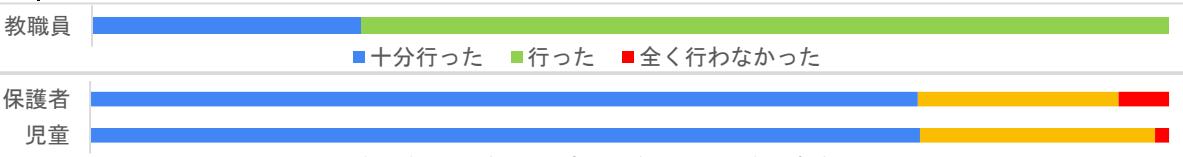
- 教職員は全員が行ったとしているのに対し、児童は7割強、保護者は9割弱となっている。
- 学校としては、ipadにインストールしているロイロノートというアプリを活用し、児童が調べたことをまとめる学習を日常的に展開していると考えているが、一方で特に1年生については、発達の段階から、前期は十分な活用に至っていないと状況があった。
- 今後は、3年生以上については、ipadからChromeBookに機種が変更することに伴い、GoogleワークスペースやCanva等の機能を活用するとともに、必要に応じて、授業のhtml化を進めるなどし、個別最適な学習につながるよう進めていく。

			十分行った	行った	全く行わなかった
7	ICT環境を活用し他者と協同しながら行う学びの推進	教職員	20.0%	80.0%	0.0%
		そう思う	どちらとも言えない	どちらとも言えない	そう思わない
		保護者	58.1%	25.6%	16.3%
		児童	66.7%	25.6%	7.7%



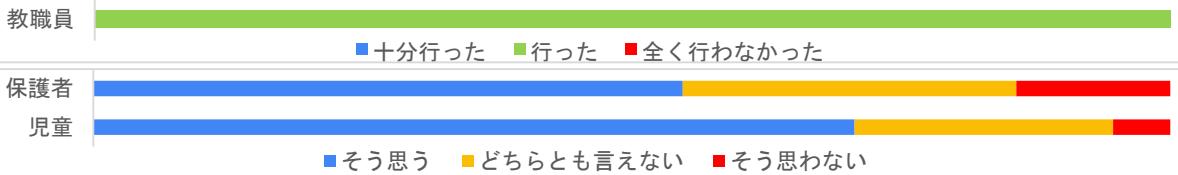
- 教職員は全員が行ったとしているのに対し、児童は6割強、保護者は6割弱となっている。
- 学校としては、自分の意見や作品を画面共有しながら交流したり、技能教科については、技や演奏等をipadで録画したものを見ながら意見を出し合う学習活動を展開しているものの、学年で取組内容や頻度、程度等に差が見られることによるものと考える。
- 今後は、校内研修でICTの効果的な活用について取り扱い、教師のICTを活用した授業力の向上を図り、学習活動の質の向上を進めていく。

			十分行った	行った	全く行わなかった
8	日常の道徳教育における計画的、発展的な指導の充実	教職員	25.0%	75.0%	0.0%
		そう思う	どちらとも言えない	どちらとも言えない	そう思わない
		保護者	76.7%	18.6%	4.7%
		児童	76.9%	21.8%	1.3%



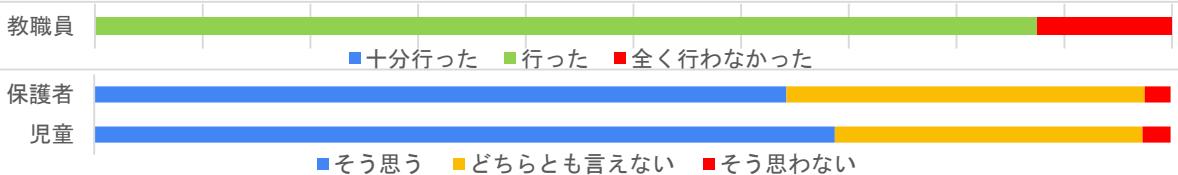
- 教職員は全員が行ったとしているのに対し、児童、保護者とも7割強となっている。
- 学校としては、道徳教育の要となる道徳科の授業の充実を図るとともに、毎月の全校朝会における校長講話を踏まえた各学級における道徳教育の充実に取り組んでいるところではあるが、挨拶や言葉遣い（礼儀面だけではなく、ポジティブな言葉掛けを通して、プラスのストロークの輪を広げること）、きまりを守るなどの指導が徹底されていないという課題が明確になったと考える。
- 今後は、学校のきまりや挨拶指導など、統一した指導を徹底していく。

			十分行った	行った	全く行わなかった
9	学び合いによって考え方を深め、心に響く道徳科の授業改善	教職員	0.0%	100.0%	0.0%
		保護者	54.8%	31.0%	14.3%
		児童	70.7%	24.0%	5.3%



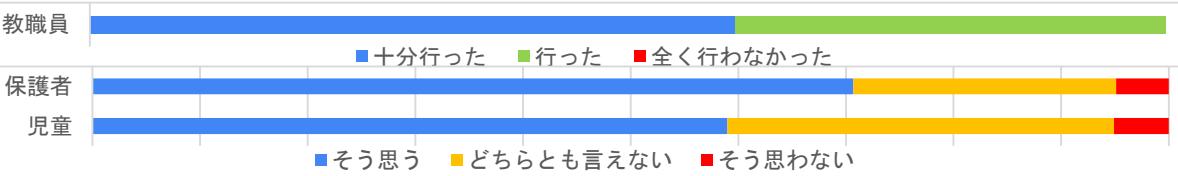
- 教員は全員が行ったとしているのに対し、児童は7割強、保護者は5割強となっている。
- 学校としては、全学級で年に1回は道徳科の授業を参観日で公開することや、道徳科の授業改善に取り組んでいるものの、教員の評価においても、「十分行った」という回答が皆無であることから、十分な取組に至っていないものと考える。
- 今後は、本校に渡島教育局からの推薦で渡島管内の道徳教育プロジェクトメンバーを務める教諭が在籍していることから、校内研修で道徳科を取り上げたり、授業を見合うなどしたりし、授業改善を進めていく。

			十分行った	行った	全く行わなかった
10	自己規範意識と望ましい人間関係を育む生徒指導の充実	教職員	0.0%	87.5%	12.5%
		保護者	64.3%	33.3%	2.4%
		児童	68.8%	28.6%	2.6%



- 教職員は9割弱が行ったとしているのに対し、児童は7割弱、保護者は6割強となっている。
- このことは、「8日常の道徳教育における計画的、発展的な指導の充実」とも関連するが、学校のきまりを守る指導が不十分であったことや、コミュニケーションスキルも含めた挨拶や言葉遣いなどについて、教職員によっては指導が曖昧になっていたという課題が明確になったと考える。
- 今後は、学校のきまりや挨拶指導など、統一した指導を徹底していくとともに、アサーショントレーニングなどのコミュニケーションスキルを向上する活動を取り入れていく。

			十分行った	行った	全く行わなかった
11-①	自分自身を信頼できる力の土台をつくる児童が自己受容できる機会の充実	教職員	60.0%	40.0%	0.0%
		保護者	70.7%	24.4%	4.9%
		児童	59.0%	35.9%	5.1%



- 教職員は全員が行ったとしているのに対し、児童は6割弱、保護者は7割強となっている。
- このことは、学校としては児童に小さな成功体験を積み重ねさせる関わりを意識したり、自分の内面と向き合う問い合わせをするなどの取組を進めているものの、依然として自分に自信をもてない児童が少なくないという課題が明確になったと考える。
- 今後は、「自分には問題解決できる力がある」「粘り強く取り組んだら、必ず目標を達成できる」といった自己信頼につながる日々の小さな成功体験を、意図的に取り上げたり、諦めそうになった時にじっくり考えさせたりするなどの取組を継続していく。

		十分行った	行った	全く行わなかった
11-②	毎日の個人目標の設定と振り返りを徹底する日誌の取り組み	教職員	44.4%	55.6%
				0.0%

教職員 

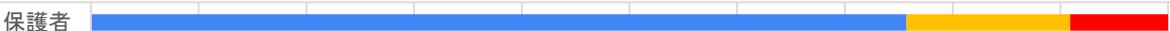
■十分行った ■行った ■全く行わなかった

○これは教員のみの項目である。
○今年度から組織的に取り組みを始めたところだが、全学年で行ったとしている。
○一方で、十分行ったが4割強にとどまっていることから、後期は取り組み方や内容の充実を図っていく。

		十分行った	行った	全く行わなかった
12	ふるさとの魅力を知り、発信する総合的な学習の充実	教職員	33.3%	66.7%
		そう思う	どちらとも言えない	そう思わない
		保護者	75.8%	15.2%
		児童	75.9%	17.2%

教職員 

■十分行った ■行った ■全く行わなかった

保護者 

児童 

■そう思う ■どちらとも言えない ■そう思わない

○教職員は全員が行ったとしているのに対し、児童と保護者はともに7割強となっている。
○3年生以上は、福島町の地域素材を題材とした総合的な学習に取り組んでいるものの、そのねらいと意義を十分理解できていない児童や保護者がいるという課題が明確になったと考える。
○今後は、「何を目的として」その学習に取り組んでいるのか、また、「どんな学習成果」が見られたのかを明確にし、学年便り等で伝えていく。

		十分行った	行った	全く行わなかった
13	目標に向かった体力づくりの推進	教職員	37.5%	62.5%
		そう思う	どちらとも言えない	そう思わない
		保護者	76.2%	19.0%
		児童	74.4%	16.7%

教職員 

■十分行った ■行った ■全く行わなかった

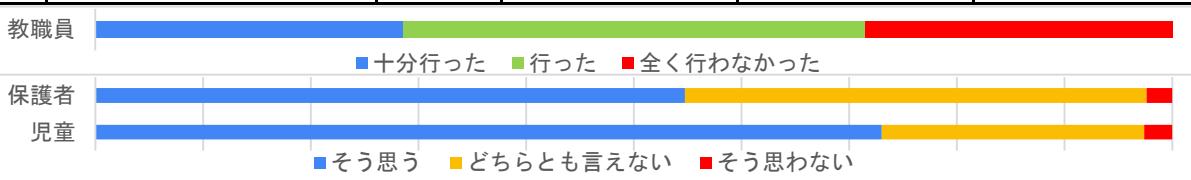
保護者 

児童 

■そう思う ■どちらとも言えない ■そう思わない

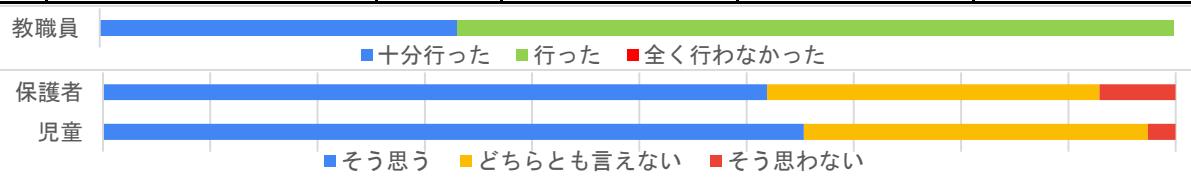
○教職員は全員が行ったとしているのに対し、児童、保護者とも7割強となっている。
○これは、新体力テストの結果を踏まえて個人目標を立てさせた一方で、自分が立てた目標を意識付けさせる指導が十分とは言えない課題が明確になったと考える。
○今後は、冬場に向けて、縄跳びや器械運動の取組を進めるとともに、新体力テストや10月に実施した2計測の結果などを踏まえ、個人の目標を見直す機会をもち、主体的に体力づくりに取り組むことができるよう指導の充実を図る。

			十分行った	行った	全く行わなかった
14	ICTを活用した体育科の授業改善	教職員	28.6%	42.9%	28.6%
		そう思う	どちらとも言えない	どちらとも言えない	そう思わない
		保護者	54.8%	42.9%	2.4%
		児童	73.1%	24.4%	2.6%



- 教員は7割強が行ったとしているのに対し、児童は7割強、保護者は5割強となっている。
- これは、積極的にICTを活用している学年がある一方で、まったく活用しなかった学年があり、取組に差が生じたことによるものである。
- 今後は、技能を高める観点から、端末で撮影した技を後から視聴しながら、改善点を話し合うなどの学習活動を計画的にどの学年でも位置付けていく。

			十分行った	行った	全く行わなかった
15	マラソン、水泳、休み時間などによる運動週間の定着	教職員	33.3%	66.7%	0.0%
		そう思う	どちらとも言えない	どちらとも言えない	そう思わない
		保護者	61.9%	31.0%	7.1%
		児童	65.4%	32.1%	2.6%

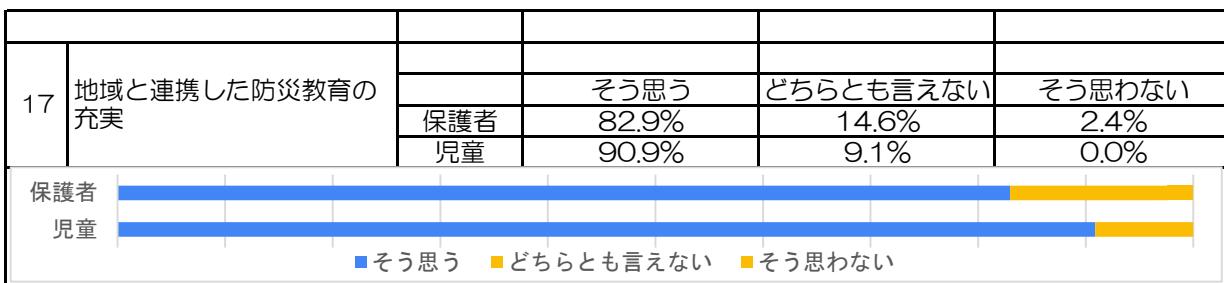


- 教職員は全員が行ったとしているのに対し、児童、保護者とも6割強となっている。
- これは、熊出没により、当初予定していた体力づくりの取組が十分できなかっことによるものだと考える。
- 今後は、冬場に向けて、縄跳びや器械運動の取組を進めるとともに、新体力テストや10月に実施した2計測の結果などを踏まえ、個人の目標を見直す機会をもち、主体的に体力づくりに取り組むことができるよう指導の充実を図る。

			十分行った	行った	全く行わなかった
16	健康を自己管理できる自律的な生活習慣の確立	教職員	12.5%	62.5%	25.0%
		そう思う	どちらとも言えない	どちらとも言えない	そう思わない
		保護者	59.5%	33.3%	7.1%
		児童	51.3%	38.5%	10.3%



- 教職員は7割強行ったとしているのに対し、児童は5割強、保護者は6割弱となっている。
- これは、生活リズムチェック表を活用した指導を十分行った学年がある一方で、全く行わなかった学年もあるなど、学年で取組に差があるという課題が明確になったと考える。また、熊出没により、家庭にいる時間が長くなることに伴い、ゲームやネットに割く時間が増えたことも考えられる。
- 今後は、定期的に生活リズムチェック表を活用するなどし、小学生として望ましい生活習慣の形成に家庭と協力しながら取組を進めていく。



- これは児童と保護者のみの項目である。
- 児童は9割強、保護者は8割強が思うとしている。
- これは、今年度、これまで実施していた防災学習についてを一歩進めて、三年生以上については保護者や地域に発表する機会を設けたことによるものだと考える。
- 今年度、本校はアクサ・ユネスコ協会減災教育プログラムの助成校に選ばれたことから、12月には地域と連携した防災フォーラムを実施予定である。一層、取組を進めていく。

【記述評価について】

- 本人が新しい目標をもって学校に行き始めている。親としても可能な限りバックアップしていきたい。
- 学習発表会に劇を復活して欲しい。
→本校では、平成29年に告示された学習指導要領において、これまでの「学芸的行事」が「文化的行事」へと、定義と教育的意義が改訂されたことを受け、従来の「学芸会」から「学習発表会」に移行しております。
文部科学省の「小学校学習指導要領 特別活動編」では、文化的行事について「児童が各教科等における日頃の学習の成果を総合的に発展させ、発表し合い、互いに鑑賞する行事」と定義されています。
学習指導要領では「平素の学習活動の成果を発表し、自己の向上の意欲を高める」ことが重視されており、従来の劇中心の学芸会から、探究活動やプレゼンテーションを通じた学習発表会に移行しておりますことをご理解ください。
- なお、本校の学習発表会については、探究活動やプレゼンテーションという観点で、次年度以降、内容の充実を図っていく必要があると考えております。
- 防災を通して地域との交流が、とても良かったと思いました。

- 子ども同士の会話にて、不適切な言葉をしていることがあれば、注意を徹底してほしい。また、挨拶の大切さの指導や、道徳の授業にて、相手の立場になって考える授業をしてほしい。
- 日常的な道徳教育や生徒指導の充実を図る必要があると考えています。とりわけ、言葉遣いや挨拶は、礼儀の基本となる大切なことであることから、学校全体で指導の徹底に努めます。
また、新しい学校教育目標で目指す子ども像として、「いろいろな考えがあることを認める子」を掲げておりますので、多様な価値や考えを認め、多面的に物事を判断できる力について、道徳科だけではなく各教科等において指導していきます。